

自閉スペクトラム症児者の心の理解



自閉スペクトラム症児者の心の理解を考える際、ユニークな直観的心理化を含め、他者にわかってもらえない共有体験が重要であることを考えてきました。現場からは、大人が一对一で関わる場面があればまだ可能だが、集団のなかで、子ども同士で共有体験をつくるのはイメージがわかないと言われるときがあります。知的に遅れない自閉スペクトラム症児の多くは通常学級におり、これは実践的にも重要な課題です。今回は、刊行されている実践（今関和子「ユウタの恋」ADHD、高機能自閉症が疑われる子どもとの「出会い直し」大和久勝・編著「困った子は困っている子」クリエイティブかもがわ）を取り上げ、この問題を考えてみたいと思います。

●ユウタさんの転校初日

ユウタさんは、2学期に転校してきた小学校1年生です。初日、先生はみんなに紹介しようと思いますが、彼は動き回り教室の前にはいません。そこで先生はみんなに尋ねます。「ユウタさんはどこから来たでしょう」。ある子が「北海道!」と答えると、それを合図に彼は教室の前に戻ります。そしてその子を指さし「ブブブー! 違いますね」。先生が「ユウタさんはどこから来たの?」と質問すると、「えつとねえ…」と話しますが、今度は話がとまらなくなりまわりは困ってしまいます。

その後、みんなが先生に連絡帳を出そうと並んでいると、彼は列を無視して差し出します。「割り込みはいけないんだよ」と言われると彼は「いいんだ、おれが一番だ!」と言いつつ返します。まわりは静まり返りますが、そこで太郎くんがこう言います。「俺と同じ、『ワリコミノジュツ』だ」。1学期よく列に割り込んでいた彼に先生は「ワリコミノジュツ使ったな」と言っていたのでしよう。その言葉でみんなが少しほっとした顔になる。そこで先生は「ユウタさんは1学期いなかったから、これか

第8回 子ども同士の共有体験をつくる

別府 哲 (岐阜大学)

べつぷ さとし/岐阜大学教授。自閉症児・者の発達や指導をライフサイクルを通して研究。著書に『自閉症児者の発達と生活ー共感的自己肯定感を育むために』『障害児の内面世界をさぐる』(以上、全障研出版部)など。現在、全国障害者問題研究会常任全国委員。



らいろいろ覚えていってもらおうね」と言います。しかしそこでユウタさんはきつとした顔でこう答えるのです。「それはできない!」。

ユウタさんはほかに、椅子に座らない、興味があるとしやべりだしてとまらない、意に沿わないとパンチする、などがあり、毎日クラスが大騒ぎになります。

●「ユウタさんだけ、fnews-1」

ユウタさんは、連絡帳を先生に渡したいと思ったら並んでいる列に強引に割り込みます。このように、まわりの思いと関係なく自分の思い通りに物事を進めようと、そうできないと怒りだすことがよくありました。こういった姿は自閉スペクトラム症にみられるものであり、その要因の一つに、人の心がうまくわからないことも関係すると考えられています。

こういったときの支援のやり方は、近年いろいろな工夫がなされています。一方、それでも支援で困ることのなかに、自閉スペクトラム症児のねがいとみんなのねがいの対立があります。例えばユウタさんにみんなと同じことを要求するなら、1時間中ちゃんと座るようにさせることになりそうです。しかしそれは彼にとって大きなストレスで、それが彼をパニックにさせてしまうこともあります。そうとらえ、座らないこと(立ち歩き)は当面、大目にみようとする先生もいます。しかしそうすると、みんなから「ユウタさんだけずるい!」と声がかかるかもしれません。ユウタさんの思いもみんなの思いも大切にしたい。だからこそ、実践する方がとても悩むのです。

ユウタさんが立ち歩いていい時間とそうではない時間をつくるといった、折衷案で対応する方法もあります。しかし、それでは両者とも「我慢させられた」思いが残る、本当に「自分の思いを認められた」気持ちになれません。そのため折衷案をどこまで譲歩しても、みんなの